



栃木縣の三日間

佐藤生

私は本年五月二十五日から二十七日迄栃木縣の道路と軌道とを視る機會を得た。茲に視たまゝ感じたまゝを記し一石を投ずることを許されたい。

日光町より湯元温泉

私が日光へ旅行したのは前後三回である。第一回は大正二年の秋で大學の修學旅行に加つた時、第二回は天津から東京に移り住んだ年の翌年即ち大正八年の秋に家族連の旅行の時第三回は今度の公務旅行である。

第一回の時は日光、中禪寺湖を見物し湯元温泉に一泊した二日間の旅行であつた。當時を追懷するに、日光町のあの狭い町内を樂隊付の貸切電車に乗せられ、饅頭などの振舞を受け賑かに岩鼻まで運ばれたことや、初めて華嚴の瀧の雄大さに接したる喜びや、又戰場ヶ原の真中で邂逅した外人宣教師と言語の履き違ひから喧嘩したことや、それからと若き日の思出は甚だ少くない。

當時は岩鼻、中禪寺湖間は甚だ峻険な山道であつて、徒歩すら頗る難澁であつた。従つて何等の交通機關はなかつ

たが、中禪寺湖から湯元温泉までは稍々平坦な地勢であつたので乗合馬車が早くから通つて居たやうである。

第二回目は老母や妻の案内役として中禪寺湖畔に一泊した旅行であつた。當時は已に日光町岩鼻間に自動車の利用もあつたが其の数は僅に五六臺で、賃金も亦非常に高く一般の利用には困難であつた。私は第一回と同じく日光町から岩鼻迄の電車に乗つたのであつたが、今度は何だか電車が馬鹿に狭く感じた。前の席に座する者と膝を衝き合せて乗らねばならぬことが誠に不愉快であつた、電車は昔と變つた譯ではないが私の境遇が變つたせいであらう。岩鼻中禪寺湖迄の山道は幾分改良された所もあつたが矢張未だ交通機關はなかつた。僅かに五十五町餘の行程に過ぎないのであつたが、三時間餘を費して夕景漸く中禪寺湖畔に達することを得たのは必ずしも老母を連れて居たせいのみではなう。

第三回目の今度の旅で先づ變つたことは東武電車が東京日光間全通して日光驛前が立派になつて居たことや、例の

狭い日光町が幅七間半に改修されたる街路を形成されたことと且つ自動車の数は六十臺餘となり俄に交通機關の發達したことである。私は金谷ホテルで夕食をした、め午後一時半日光町を出發して途次華嚴の瀧を見物し湯元温泉に一浴して午後五時半には再び日光に歸ることが出来たのであつた。是等は十年前に比すれば全く隔世の感を深ふする。

尤も岩鼻、中禪寺湖間五十五町餘は未だ完全なる二車線幅を有した道路でないの上り下りの時間を定めて自動車の運轉を行つて居る。馬返し見晴茶屋間千六百尺の高さを登るに四十二曲りの羊腸たる山道で、而も十五分の急勾配の箇所が相當多い、慣れない運轉手では運轉に餘程骨が折れるらしい。然し切り換へなければ曲りきれぬ屈曲は僅かに一箇所であり且つ曲り角の崖側には極めて頑丈な防禦壁が設けてあり、殊に眺望佳絶の場所に設けたるものにはベンチを兼用した構造となつて居たのは縣當局の周到なる考慮に依ることゝ深く敬意を示した。

華嚴の瀧は日光に遊んだ都度見物して居るので今度は別

段見たいとも思はなかつたが、丁度見晴茶屋から華嚴の瀧の見物茶屋に至るエレベーターが出来て居たので、未だ開業はしてなかつたが現場係員の好意に依り試乗した。此のエレベーターは高さ三百二十五尺の二本の堅坑を岩盤中に穿つたもので、片道僅に一分間で瀧の直ぐ前に達することが出来る。何でも工費四十萬圓を投じた由である。只今休憩所兼食堂として鐵筋混凝土の立派な建物を大急ぎで建設中であつた。近く開業する筈であるがスピード時代の産物としては適はしいものゝ一つであらう。

見晴茶屋より葛蒲濱間四十二町餘は所謂湖畔の遊覽道路として誠に氣持の良い道路である。線形が如何にも自然であつて沿道に於ける一木一石たりとも自然の美を損ぜぬやう施工されて居たのは嬉しかつた。湖を放れ龍頭の瀧を左に眺め地獄川に沿つて登れば即ち戰場ヶ原である。正面に三岳右に二荒山左は大嶽の翠巒に擁せられたる一體の平野に三々五々老いたる落葉松の聳立する間に、名も知れぬ草花が歩々の間に咲き亂れたる美しさはえも謂はれぬ眺であ

つた。道路は三本松に於て右折し湯瀧に達す。縣は目下此の區間の道路改修中であつたが、線形を餘りに直線に選んだ爲め何だか附近の風景に釣り合はぬやうに思はれた。湯元への湯治客、何れ急がぬ旅なれば、飽かず此の勝景を觀賞し得るやう線形を定め、同時に道路の美化と云ふ問題に今一段の考慮を拂つて欲しかつた。此の意味に於て土羽として野生の柳を植ゑ込んだことは良い思ひ付だと思つた。

湯元温泉も先年の大火後立派に改築され、設備も整頓し居心地のよい旅館が六七軒も出来たので、湯治旁々避暑地としては如何にもよい所となつた。然し隠遁した氣分にもならなければ淋し過ぎて、永逗留は飽いて來るかも知れぬ。

西那須野より鹽原

鹽原へは今回が初旅である。私は紅葉山人の金色夜叉を讀んで以來是非一度鹽原を見物してみたいとの宿望を持って居たので此の旅行は何だか昔の戀人にでも會ふやうな氣持

であつた。縣當局及山田鹽原電車專務の案内で西那須野を出發したのが午前十時頃だつた。西那須野から關谷までは大體直線の道路で道幅も相當廣く他では見られない外形の整つた道路である。且つ地質が鎔岩の礫若くは火山灰でもあらう乾きが極めてよい。聞けば彼の有名なる三島縣令時代の遺業である由、今更ながら同縣令の先見の明には敬服せざるを得なかつた。然し軌道敷の不備と、電柱が如何にも亂雑に建て込まれて居た事は、現在の交通程度が是で満足するものかも知れないが、將來に就ては相當考究せねばならぬ問題であらう。

沿道は如何にも野趣滿々たる平野で、大部分松方家や三島家の所有地で、松方農園は數方里を擁して居るさうである。人家は甚だ稀でたゞ見渡す限りの松林である。道路の一侧に鹽原電車が時々淋しい音を立て、過ぎ去るのを見る、終點を鹽原溫泉迄延長し、併用を新設してスピード時代に適合するやう改良しなければ自動車に對抗しての經營は餘程困難であらう。

關谷より道は山に當て即ち左し箒川に沿つて上る、彼の紅葉山人が金色夜叉の一節に「柳も鹽原の地形たる鹽谷郡の南より群峰の間を分けて深く西北に入り綿々として箒川の流れに浜る片岨の四里に岐れ十一里に互りて、到る處巖の水を夾まざる無きは宛然青銅の藥研に瑠璃末を碎くに似たり先づ大網の湯を過れば根本山、魚止瀧、兒ヶ淵、左靱の嶮は古りて白雲洞は朗に布瀧、龍ヶ鼻、材木石、五色石船石など眺行けば鳥井戸、前山の翠衣に深みて福渡の里に入るなり」とあり、能く鹽原の風景を敘し得て餘りあり敢て駄筆を加ふる要なからん。されど私には來て見れば左程でもないといふ感を深ふした、矢張時代に適しい改善を怠つた爲めではあるまいか。